

氏 名	KWON CHOWON (グオン チョウオン)		
学 位 の 種 類	博士 (造形)		
学 位 記 番 号	博第 52 号		
学 位 授 与 日	2025 年 3 月 14 日		
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当		
論 文 題 目	樹の絵画的可能性と絵画表現研究 －自作を中心に－		
審 査 委 員	主査	武蔵野美術大学 教授	樺山 祐和
	副査	武蔵野美術大学 教授	村上 博哉
	副査	武蔵野美術大学 教授	間島 秀徳
	副査	武蔵野美術大学 教授	是枝 開

内 容 の 要 旨

本論文は、樹をモチーフにした絵画作品の方向性を探ることを目的としている。最初に、相反する二つの自然観と美術史上の自然表現の特徴について考察した。そして、両者の統合を基本的な脈略とする筆者の芸術観とモチーフの意義を考察し、先行作家研究を基に自作の制作方法を補完し、発展させた。本論文の各章による議論に従って導き出した結果は次の通りである。

第二章の「自然観の二つの傾向」では、文化史上に表れる自然観を「機械的自然観」と「有機的自然観」に分類して論じた。考察の結果、各々の自然観の背景には、人間と自然の関係が影響を与えていた。そして、筆者の追求する自然観である「有機的自然観」は根本的に統合と調和のビジョンを保っている。

第三章の「西洋近代絵画における自然表現」では、西洋美術史の中で本格的に自然が絵画の主題として登場し始めたドイツ・ロマン主義を筆頭に、後期印象派と抽象表現主義を考察した。これら三つの芸術運動は、自然や内面、非可視的なものなど現実から見落とされた価値を絵画において回復し、極を成すものを統合しようと試みたのである。

「先行作家研究」では、自然をモチーフとし、相異なる造形要素を調和して表現する三人の画家を選定して各々の表現特徴の分析を行い、筆者の絵画制作に参考になる表現方式を見つけ出した。初めにセザンヌの考察を通じて、色と形、動と静、実在と感覚など対立するものを統合する視覚的作用について論じた。彼の方法は、客観的な側面と主観的な側面を同時に表すことで、風景を見る視覚経験のリアリティを表現している。そして、オキーフの省略と強調の方式は自然の観察と画家の視覚的な関心を総合的に見せる表現方法である。最後にゴーキーの方式は、図と地の融合によって有機的な絵画空間を構成する。

これらの作家たちの作品は、ナラティブ性を避けながら造形要素を用いて自然のテーマを表現する方法の糸口を筆者に示した。

第四章の「自作に関する考察」は、まず「1. 作品コンセプトの展開」で作品コンセプトの展開について考察した。最初に、シェリングの理論を背景に、筆者の制作意義が自然（客観）と精神（主観）の構造的な統一を試みることでであると定義した。また、絵画制作において自然との原初的な接触を可能にする身体的な体験の重要性を、メルロー＝ポンティの「肉」の議論に基づいて説明した。続いて、文化史に見られる樹のモチーフの分析により、樹が普遍的な共感を呼び出す潜在力を持ったモチーフであることを示した。そして、「2. 造形研究」では、先行作家研究を参考にした作品制作の結果と表現の特徴を分析し、制作意図がどのように表れているのかを論じた。

本論文を通して、作品の理論的背景や造形的考察によって、筆者の制作が統合の概念を目指していることを確認した。そして、画家としての自分の位置を確かめ、制作の目的と表現の理由を考察した。筆者は過剰と欠乏で分裂し、自然と遠ざかっていく今の時代だからこそ、自然を懐かしむことや原初的な世界を夢見ることは人間の本能だと主張する。今、筆者が樹を描こうとすることもそのような本能に従っているのである。

審 査 結 果 の 要 旨

論文講評

本論文は副題にある通りグォン・チョウォンが自身の絵画制作の意味を探究することを軸に、モチーフである自然、とりわけ樹木といかに向き合い、その対話を通じて生起する感覚的、感情的、身体的、思考的な様々な気づきを発端に、洋の東西を並置、対比させながら自然観研究、美術史研究、哲学研究、作家研究等を通して現代に生きる者として自然を描くことの意味と、今後の制作の指針と方向性を明確にするために考察し論じたものである。また、論文は自身の制作という個人的な範疇にとどまらず、人間はいかに自然と向き合ってきたのか。そして現代人にとって自然とはいかなるものなのか。いかに向き合うべきなのか、という提言をも含む論考となっている。

第一章、序論は研究の背景と目的が述べられているが、ここで重要なのはこれまでのグォンの制作が自身の内面世界を象徴的に表現したものであった事への言及である。この内部と外部という思考性は以後に続く論考や、特に制作における基本的な姿勢を規定している重要なものとしてある。極めて強く内面に注がれていた眼差しが、外部である自然に注がれた時、引き起こされる表現とはいかなるものなのか。また、章の最後に自然の生命力と循環性という主題を目的とすると言及にグォンの自然への考え方が現れている。

第二章、自然観の二つの傾向、においては「自然の対象化」と「自然との一体化」という二つの項目を立て論じている。自然に対する人間の自然観を「分離的關係」と「融合的関係」にあるとし、それらを「機械論的自然観」と「有機体的自然観」と位置付け、西洋

と東洋という地理的な違いによって生じる自然観でもあると言及している。まずは人間が
いかに自然を対象化してきたのかを論じ西洋と東洋の思想家とその思想を引き合いに出し
ながら、人間が自然をどのように捉えているのかという差異に注目し、ここで初めて神の
存在に言及し、神と人間と自然との関係性に触れている。自然観とは死生観につながり神
をいかに考えるかにつながるものである。人間と自然の二極化が肉体と精神の分離、理性
と感性の階層化につながると指摘する。また、東アジアの思想家やその思想に触れ、母国
韓国の古代国家であった古朝鮮の建国神話が盛り込まれた思想を取り上げ、自身の表現の
ルーツを探るかのような論考には自身のアイデンティティーの所在を探ろうとする意図が
窺える。次に自然の対象化と同様の方法で自然との一体化について西洋と東洋の哲学、思
想、美術を対比させ論じている。自然を対象化する過程と意味を示し、二局分裂的な事態
を克服する対案としての自然との一体化が、自然の概念を物理的なものから精神的なもの
へと拡張させたとし、自然と人間を同じ生命として見ようとする。そして、それは最終的
に言及される「統合」という考え方に繋がってゆく。第二章は人間の自然観の変遷とともに
グォンの制作を根底で支える基本的な概念が示されている。

第三章、西洋近代絵画における自然表現では、表層から深層への移行という項目を立て、
第二章で示された自然との一体化という考えに合致する絵画表現として、ドイツロマン主
義<自然と精神の統合>、後期印象派<新たな視覚と主観的表現>、抽象表現主義<表層
から深層へ>といった美術史上の様式、イズム上において自然はいかに表現されているか
を考察している。また先行作家研究において、ポール・セザンヌ<世界に出会うリアリ
ティーと絵画>、ジョージア・オキーフ<省略と集中>、アーシル・ゴッシー<有機的抽
象と産出性>と題し、3人の画家を取り上げ、副題には作家を考える際のポイントが示さ
れているが、各々の作家の出自、制作環境に触れながら哲学者、研究者の言説を示しつつ
具体的な制作方法について論じている。その思考性、造形性、絵画性を軸に自然がいかに
表現されているかを分析、考察し、第四章、自作に関する考察へと展開している。

第四章、自作に関する考察では、母国、韓国の民俗信仰である「胎夢(テモン)」を冒頭
に取り上げているが、ここにはグォンの制作の根源的な動機が率直に示されている。それ
は自身の出自に纏わることである。樹をめぐる考察や制作は言い換えれば生命に対するそ
れであり、生命の起源と循環がテーマであるとする考えには、自身が今、ここに存在する
ことへの不思議が現れていると言えよう。そして制作とは実在と内面との対話によって生
じる心象を形象化する事としている。また東アジア的価値観を土台にした上で、特にシェ
リングとメルロ・ポンティーの哲学を取り上げ共感しているが、ここで重要なのは「統合」
という考え方に注目している事である。自然と精神、主観と客観、理性と経験といった二
局に分裂したものを統合することの重要性に言及し、創造する行為を通して自然と自分と
絵画を統合することを試みようとする。そして、自然を描く意味はそれを画面に再現する
ことではなく、生まれるようにすることだと論じている。また、樹をモチーフにすること
については「軸」「接神」という二つの考えを提示した上で、太古から人間は樹を通して

集合的無意識の元型を見てきたとし、それは神と人間を繋ぐ「媒介性」にあるとしている。しかし樹自体に媒介性の元型が内在するのではなく、樹の有り様が人間に備わる集合的無意識を刺激することで媒介性といった元型が発動する、という指摘は、樹という存在を純粹にただ在るものとして尊重している、という点において秀逸である。

第五章、結論においては自身の制作が「統合」の概念を目指していると言及している。それは、生と死、在ると無い、見えると見えない、肉体と精神、物と霊、意識と無意識といったものの統合は描く行為によって実現することを示している。それは、自然からの自己阻害を食い止め、ひいては自己喪失の危機を食い止める大きな力となることへの自覚でもあるだろう。

作品講評

作品制作領域においては、絵画表現と言語表現という、ある意味相容れない部分が生じる場合があるが、公聴会における作品は、論文の主旨に則した非常に質の高いものであった。特に最後に制作した（作品画像資料「夏風」）の大作はこれまでの思考を根底に据え、観察とイメージ、感性和身体とがバランスされ、外界（自然）が持つ複雑さと内面（自身）がもつ濃密さが合わさった非常に質の高い作品として結実していた。

本論文審査

公聴会において主査、副査、合計4名により本論文審査を含む形で行われた。

冒頭、発表者の紹介の後、本論文のプレゼンテーションが行なわれ、終了後、各審査委員から意見が述べられ、来場者からの質疑応答の後、主査による公聴会のまとめが述べられた。博士準備室に移動し協議の結果、論文とともに作品の質が格段に向上している事が確認され、グォン・チョウォンの博士本論文を可とすることが全員一致で決定した。

〈目次〉

第一章 序論

1. 研究背景と目的
2. 研究方法と範囲

第二章 自然観の二つの傾向

1. 自然の対象化
2. 自然との一体化

第三章 西洋近代絵画における自然表現

1. 表層から深層への移行
 - 1-1 ドイツ・ロマン主義 <自然と精神の統合>

1-2 後期印象派 <新たな視覚と主観的表現>

1-3 抽象表現主義 <表層から深層へ>

2. 先行作家研究

2-1 ポール・セザンヌ <世界に出会うリアリティーと絵画>

2-2 ジョージア・オキーフ <省略と集中>

2-3 アーシル・ゴーキー <有機的抽象と産出性>

第四章 自作に関する考察

1. 作品コンセプトの展開

1-1 再現される自然から生まれる自然へ <作品制作の意義>

1-2 樹を描くことについて <樹のモチーフに対する考察>

2. 造形研究

2-1 丁寧な非再現

2-2 有機的な画面構成

2-3 植物から生物性へ

2-4 色について

第五章 結論

代表作品

参考文献

参考図版



真夏 73.0×73.0cm 油彩、カンヴァス 2024 年



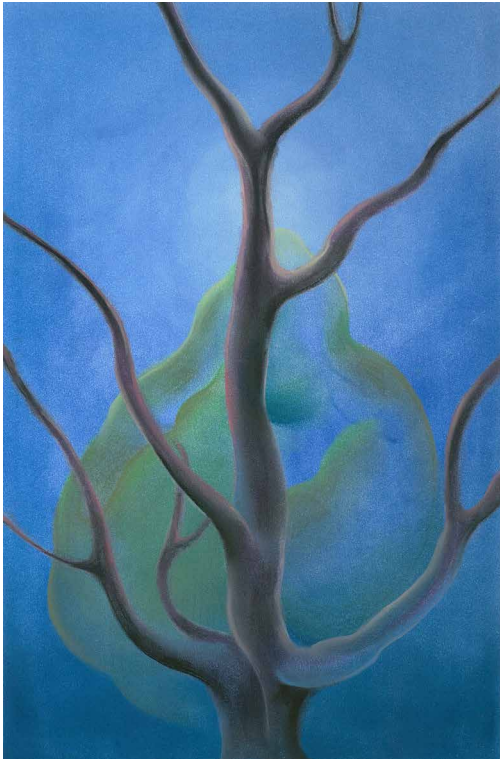
木の骨 No.2 151.0×60.0cm 油彩、
カンヴァス 2021 年



春の始まりに伸びをする 130.5×162.0cm 油彩、カンヴァス 2023 年



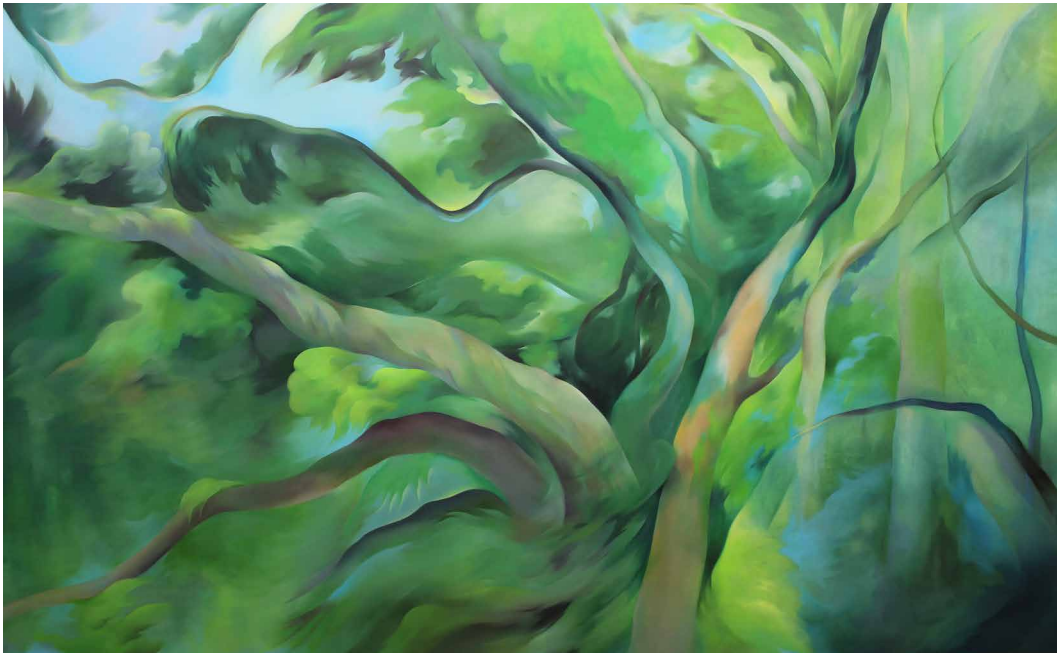
木のララバイ 180.0×117.0cm 油彩、カンヴァス 2023 年



真夜中の心 35.0×22.7cm パステル、画用紙 2023 年



冬の木 No. 1 30.3×19.5cm パステル、画用紙 2023 年



夏風 187.5×305.5cm 油彩、カンヴァス 2024 年